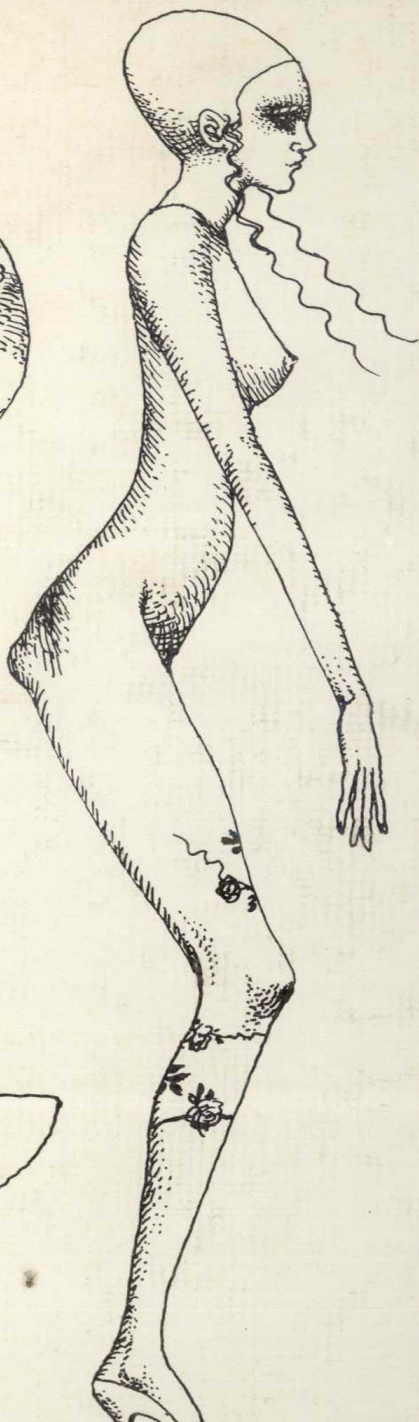
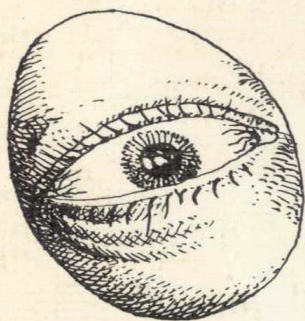
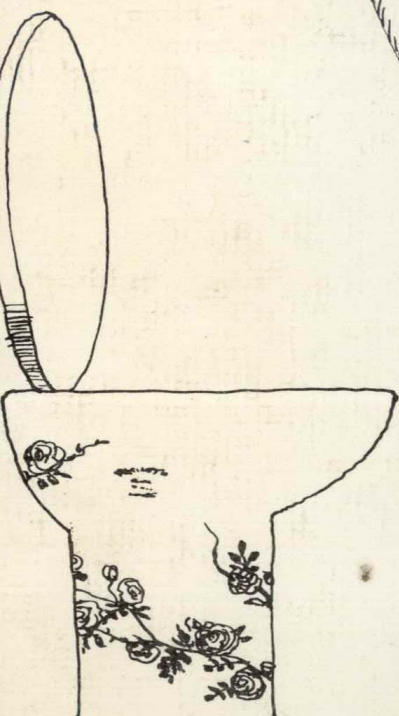
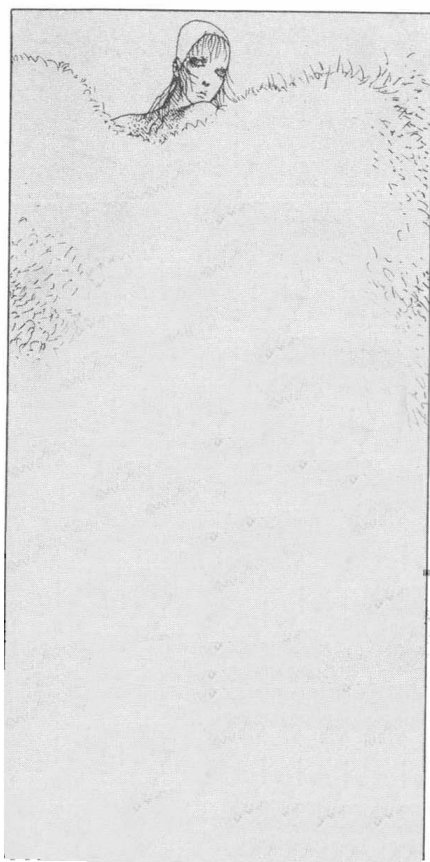


Aguirax





甘い道草



中央公論社

甘い道草

昭和四十七年七月二十五日初版
昭和五十二年四月二十日再版

著 者 梶山季之

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一
振替東京二一三四
©一九七二 検印廃止

目次

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
甘い道草	倒錯の世界	香港にて	ひとつ如何	女王と奴隸	苦い告白	ある邂逅	変身	倒産寸前	泣きそうな声	殴る手を……	親友の父
310	281	252	222	195	167	139	112	85	58	30	5

插装

画帧

宇野
亜喜良

甘い道草

1 親友の父

1

……帝都ホテルは日比谷公園の近くにあつて、日本の代表的なホテルとして、海外にその名を知られていた。

そして、そのホテルのアーケードの中に、クローパー毛皮宝飾店はあつた。

海外から、毛皮や原石を輸入し、自社工場で加工して販売するのが主な仕事だ。

ふつう、こうした高級な装飾品を扱う店は都市の目抜き通り——たとえばニューヨークなら五番街^{フィフス・アベニュー}とか、東京なら銀座といったところに、店舗を構えるのが常識である。

しかしヘクローパーの社長である黒田貞江は、有名ホテルの中にしか、店を出さない主義であつた。

素人には、ちょっと理由はわからない。でも、女店員として勤めはじめて三年目を迎える里見京子には、漠然とだが、その社長の意図が、わかるような気がしていた。

その日——京子たち女店員は、黒田貞江の命令で、全員、振袖を着て店に出た。

一月十五日、つまり成人の日で、しかも大安の日とあつて、祝宴や披露宴も多く、多勢の客の出

入りが予想されるからだろう。そういう点、黒田社長は商売上手だった。

それでも午前中は、客が少なかった。

ホテルに泊っている外人客が、何組か、冷やかしに來ただけである。

冷やかしか、どうかは、客が店に入ったときに、大体の見当がつく。これは三年間の修行の賜物である。

京子は、独りで入って來た白人女性と、アベックで來る日本人客にしか、笑顔を決して振り撒かない。なぜなら、冷やかしでない可能性が強いからである。

日本人と白人では、たとえば毛皮に対する感覚が違ふ。

白人にとって、毛皮は防寒と裝飾をかねた必需品なのだ。ちょうど、日本女性が、母の遺品の着物大切に着るように、白人女性は祖母や、母の遺品の毛皮コートなどを、誇らし気に自慢する。

母娘三代にわたって使用しても、まだ着崩れしないのだから、高級品であるという考え方なのだ。その点、日本女性の場合には、虚榮のためにだけ、毛皮が存在している。

白人女性は、毛皮が欲しいとなると、自分独りで、何軒もの専門店を歩き廻る。それだけ、毛皮の値打ちを知っているからだ。

そして、自分の求めたい品が決まると、やっとそこで、自分の愛人なり、旦那さんなりを店に連れて來るのだった。

その時には、もう、京子とは顔馴染みになっている寸法である。ヘクローバーに勤めだしてから、京子はYWCAに通って、英会話を勉強した。耳がよく、発音もよいらしく、今では英文科を

出た主任よりも、喋言することは上手である。

女尊男卑といわれるアメリカ人だって、財布だけは男性が握っているのだった。サラリーマンの家庭だって、毎朝、亭主がその日の惣菜代を、現金で妻に手渡してゆくのが常識だという。

まして、毛皮とか、宝石のような高価な品物になると、白人男性の権限は絶対である。

白人とはいっても、そこは女性だから、毛皮の質よりも、色とか、デザインを中心に好みの品を選ぶ。

しかし、金を出す男性の方は、問題は深刻である。表面はニコヤカだが、心の中では迷いが、ありありと見えるのだった。

そこで京子は、

——なぜ、この品物が高いか。

ということをし、理詰めで説明する。

毛皮は、一に鞣なめし、二に裁断、三に縫製で値打ちが決まるのであった。

いくらサファイア・ミンクでも、鞣の技術が下手だと、着崩れしたり、毛が抜け落ちてしまう。

京子は、そうした加工技術のことから話を進めて、日本には、「安物買いのゼニ失い」という諺がある……などと、ジョークを飛ばしてみせるのだった。

白人男性は理窟に弱いから、京子の説明をきくと、十中八、九、納得する。そして白人女性から京子は、感謝されるのだった。

難攻不落の夫を、よくぞ説得させてくれた……というので、飛び上って京子にキッスした大使夫

人もおれば、それが機縁で、何人も客を紹介してくれたアメリカの舞台女優もいる。

ところが日本人客の場合は、毛皮の尊さを知らぬ者が大半であった。

アベックで這入って来て、

「ねえ、買って！」

と奥さんなり、愛人が甘え、男性は自分が金持であることを誇示するために、ウン、ウンと小切手帳をひろげるケースが多い。

そこにはお互いの虚栄のために、毛皮や、宝石が存在しているのだった。

なかには、ひとりで店に来て、パツパと買物してゆく日本女性もなくなはないが、みんな黒田貞江のような女実業家か、芸能人たちである。

そして殆ど必ずといってよいくらいに、買物したあとから、ここを直せ、あそこを直せと難癖をつけてくる。

金があるのだから、自分の気に入ったデザインで仕立てさせればよいと思うのだが、衝動的に買物をして、あとで、

——気に入らないから引き取れ。

などと言われては、その客を担当した店員としては、泣くに泣けないのであった。

なぜなら、アフターサービスは、その客に品物を販売した者の責任となるからだ。

……その点、客を見る目の肥えてきた里見京子は、そうした失敗も殆どなく、黒田社長からは気に入られている。

女店員のなかには、

「社長さん……仲治さんのお嫁さんに、あなたを候補のひとりに考えてるらしいわよ」と、真顔になって言う者もいた。

仲治というのは、社長の一人息子で、グウタラで、どうしようもない人物だった。一応、会社の常務という肩書はあるのだが、黒田社長は、度重なる放蕩三昧に懲りて、会社の金は一銭も仲治の自由にさせない。

そして黒田貞江の一生は、離婚後、この一人息子を育てるために捧げられてきたのだから、人生は皮肉だった。

2

「いまのうちに、食事に行つてらっしゃい」

里見京子は、二人の同僚に声をかけた。

交替で食事に行くことになっているのだが主任の森が風邪で休んでおり、午後からは混みそうなので、京子は気をきかして、そう言ったのだ。

「そうね。もう十二時ね」

二人の同僚は肯いて、長い振袖を金魚の尾ビレのようにひらめかせて、店から出て行った。

京子は、そんな二人の振袖姿を見送りながら、

へ彼女たちは自前だけど、あたしの振袖は借り衣裳……

と、心の中で淋しく呟く。

彼女だって、何年か前の成人式には、自前の振袖姿で出席したのだった。

しかし、その振袖も、今はない。

父と母が離婚したのが原因である。

京子の父は、自動車の修理工場を経営していたが、くだらない発明に凝って、赤字のために首が廻らなくなってしまう、母はとうとう離婚を宣言して、家を飛び出してしまったのだった。

京子と、弟の夢二とは、父親に引き取られることになったが、保険の外交員として再スタートした父が、変な女を引き摺り込んできたので、彼女は腹を立て家出した。

母親は、住み込みの家政婦として自活していたので、母の許にはゆけない。

そんな京子に、救いの手をさし伸べてくれたのが、同級生の志賀順子だった。

順子の父は、大阪のホテル経営者である。月に何度か、上京するので、自分の宿泊所を兼ねて、娘に一軒の家を買い与えていたのである。

里見京子は、順子の家に厄介にはなっただけれど、なるべく迷惑をかけまいと思い、

「食費を入れさせて頂戴」

と言った。

順子は笑い飛ばしたけれど、京子は申し訳なくて、振袖を質屋に持って行って金をつくり、婆やさんに手渡したのである。そして、その振袖は流れてしまった……。

京子は、そんなことを苦く回想し、

「早くアパートを借りて、独立したいもんだわ……」

と思った。

いま京子は、ヘクロバーの毛皮工場の二階につくられた女子寮で、女工たちと一緒に生活しているのである。それは、地方から女工員を募集させるために、つくられたものだった。

透明なガラスのドアがあいた。

泊り客らしい、褐色の皮膚をもった夫婦らしい二人連れの客である。

「インドネシアの人だわ」

京子は、そう判断しながら、ただ客に笑顔を送った。

低開発国の人々で、日本へ来て、帝都ホテルへ泊るような客は、大体において大金持である。その意味では、上客だった。

ただ、文明国へのコンプレックスがあるらしく、店に入るや否や、店員から声をかけられると、あたふたと店を立ち去ってゆく者が多い。だから京子は、無言で、ただ微笑したのである。

その夫婦は、毛皮には目もくれず、宝石や貴金属類の並んだショーケースの方へ、ゆったりと歩んでくる。

これは買物に目的をもつ客の、自信に溢れた足取りである。

里見京子は、躰を移動させた。

二人はケースを覗き込んでいる。

頃合いを見計らって、彼女は、

「グッド・アフタヌーン……」

と挨拶し、

「メイ・アイ・ヘルプ・ユー・サー？」

と言った。

これは紋切り型の台辞だが、白人以外には、この方が無難である。

「ジョー・ミイ・ジース！」

夫の方が、チョコレート色の長い指で、上段にある宝石を示した。

エメラルドの一級品である。

すでに鉱脈が尽きたのか、エメラルドの産出量は、年々歳々、少なくなっているということである。

その故為か、エメラルドの値上りぶりは、ダイヤモンドを上廻っている模様であった。

鍵をあけて、内側の戸をひき、エメラルドを取り出す。それは、赤い小函の中で、翠りの女王のような輝きを放っていた。

客は、妻の指に嵌めさせ、

「うーん、立派だなあ……」

と唸っていたが、やがて指輪にぶら下った数字を眺めて、思わず目を剝いた。

値段は、五万ドル。邦貨にして、千八百万円である。

京子は、その褐色の紳士の表情から、

へハハア、零を一つ見落しているな……」

と察し、心の中では可笑しかったが、表情は動かさずに、

「失礼ですが、奥さまには、この石はお似合いになりませんか。こちらの、ルビーの方が、お似合いかと存じます」

と告げた。

客に恥を掻かさないのも、店員の礼儀の一つなのである。

彼女は、別の陳列ケースの鍵をあけ、ルビーを三種類ぐらい、ケースから取り出して並べながら、不図、常務の伸治が店に入って来る姿を認めた。

伸治は、近づいて、

「ひとりかい？」

と横柄な口を利く。

「いま、みんな食事ですの……」

京子は無視するように答える。

夫婦の客は、出されたルビーを、指に嵌めて鑑賞していた。

値段は五千ドル前後のものばかりだ。

相手が買い易いように、一桁下の、その宝石を取り出したのである。それに、皮膚の黒い人種には、深い翠色をもったエメラルドは、似合わないであった。

五万ドルものエメラルドの指輪が、無造作に転がっているのに気づいて、彼女はそれを小函に入

れると、ショーケースの中に納い込んだ。

そして鍵をかけようとしたとき、また新しい客が入って来た。

背の高い白人夫婦が、二十歳ぐらいの娘を連れている。

「あ、ジョンストンさんだわ」

京子は顔を輝かした。

ジョンストン氏は、有名な化粧品メーカーの東京支店長である。なかなかの愛妻家で、誕生日には必ず妻に、宝石をプレゼントする慣わしだった。

アメリカ人だから陽気で、いつか京子に、

「妻が長生きすると、私は貧乏する。いっそ毒薬の宝石でも売ってくれよ……」
と冗談を言ったことがある。

たしか去年の暮だったが、店を覗いて、

「来年、娘は二十歳になる。毛皮のハーフ・コートを贈りたいので、心掛けておいて欲しい……」

と、京子に頼んで行った。彼女は、その約束を思いだし、

「常務さん。こちらの方に、ルビーをお奨めしてんです。お願いね……」

と、黒田伸治に声をかけた。

「ああ、いいとも！」

相手は肯いた。

安心して京子は、ジョンストン夫妻の方へ、笑顔で挨拶しながら歩み寄った――。